

新交響楽団第88回演奏会

ベートーベン交響曲第7番イ長調作品92/プロコフィエフ「ロミオとジュリエット」より抜粋

指揮▶河地良智

1980年6月15日(日)午後2時開演/東京文化会館大ホール

新響
アマチュア・オーケストラ

解説

新交響楽団では年4回の演奏会に対し、それぞれ、企画・基礎練磨・名曲・挑戦というテーマを設けているが、今回は基礎練磨にあたり、特に躍動するリズムを通じ、確かな構成の音楽を表現することに重点を置いた。

このため、プロコフィエフのバレエ音楽「ロミオとジュリエット」の抜粋と、ベートーベンの9つの交響曲中最も躍動的であり、ワーグナーによって“Apotheose des Tanzes（舞踊の神化）”と呼ばれた第7番をとりあげた。

またリズム訓練の一助として、メキシコの作曲家Jose Pablo Moncayo（ホゼー・パブロ・モンカヨー）の“Huapango（ワパンゴー）”を毎回の練習にとりあげ、今回のアンコールとして演奏する。

■プロコフィエフ
「ロミオとジュリエット」より抜粋

❶、モンタギュー家とキャピュレット家　❷、少女ジュリエット
❸、朝の踊り　❹、ある場面　❺、仮面の踊り　❻、タイボルトの死
❼、ジュリエットの墓の前のロミオ

「ロミオとジュリエット」は、今でこそバレエ音楽の傑作とされるが、作曲当初はそれまでの踊りの伴奏音楽を越えた斬新なものであったため、踊り手たちからはあまり歓迎されず、作曲者の編による組曲が先に上演された。今回はこの3つの組曲の中から、全体としてシンフォニックな構成をもたせることに重点を置き、7曲を選んで演奏する。なおバレエは通常3幕14場で上演される。

❶、モンタギュー家とキャピュレット家
（1幕4場）

——これから始まる悲劇を暗示する緊張感ある導入部に続き、キャピュレット家の大広間いっぱいにくりひろげられる騎士達の荘重だが競い合うような踊り。中間部は、ジュリエットが婚約者パリスと気のない様子で踊る。

❷、少女ジュリエット（1幕2場）

——ジュリエットが最初に登場する場面。まだ幼なさが抜けず元気にはしゃぐジュリエットを乳母がやさしく悟し、まだ見ぬ恋への憧れを語る。そこへジュリエットとの結婚を望む若い貴族パリスが現れ、ジュリエットは激しく動揺する。

❸、朝の踊り（1幕1場）

——物語の舞台となるヴェロナの町の広場に三々五々集まった人達の活気ある踊り。

❹、ある場面（1幕1場）

——広場を行きかう人々の一見平和な情景。最後の強烈な和音が、両家の不和による一触即発の危険を暗示する。

❺、仮面の踊り（1幕3場）

——キャピュレット家の舞踊会に潜び込もうとするロミオ達3人が仮面を付け、敵陣に乗込む心意気で元気に踊る。最後にひっそりと門の中にすべり込む。

❻、タイボルトの死（2幕3場）

——親友マキューシオをタイボルトに殺され、ジュリエットとの恋のために平和を願うロミオは復讐に燃え、激しい闘いとなる。重傷を負ったタイボルトは断末魔の苦しみの末息絶え、ますます深まる悲劇を表わす痛ましい葬送の音楽が緊張を高める。

❼、ジュリエットの墓の前のロミオ（3幕4場）

——ジュリエットは仮死状態になる薬を飲み一旦葬られるが、そうとは知らぬロミオは墓に忍び込み、1人残っていたパリスを刺し、自らも毒をあおる。やがて目を覚ましたジュリエットは、ロミオをみつけて喜こんだのも束の間、死んでいるものとわかり、自らの胸を刺し、ロミオの傍らで静かに息を引取る。

■ベートーベン
交響曲第7番　イ長調 作品92

▷第1楽章／ポコ・ソステヌート——ヴィヴァーチェ

▷第2楽章／アレグレット

▷第3楽章／プレスト——アッサイ・メノ・プレスト

▷第4楽章／アレグロ・コン・ブリオ